

“観光”やめます “関係”はじめます

島根県邑南町

～地域活動の新たな担い手「関係人口」～

移住者という「定住人口」でもない、観光客という「交流人口」でもない。地域との関わり方において、定住者より浅く、観光客よりは深い「関係人口」というカテゴリーが注目されている。人口減少と高齢化が同時に進み、地域づくりの担い手不足という課題に直面している地域では、「関係人口」が地方再生の鍵として期待されている。そうした中、廃線となったJR三江線の資産を活用して、鉄道ファンという関係人口の力を借り、地域活性に取り組んでいる地域がある。邑南町羽須美地域である。



島根県

羽須美地域

邑南町

「観光」やめます「関係」はじめます

「地域活動の新たな担い手「関係人口」」

邑南町 人口10,274人、世帯数4,787戸（令和3年4月末現在）
島根県中南部の中山間地に位置し、町域の南側と東側は広島県に接しており、中国地方最大の河川・江の川が北流している。平成16年10月、羽須美村・瑞穂町・石見町の3町村が合併し誕生した。江戸期は江の川流域の舟運や街道交通の結節点として繁栄した地域で、たたら製鉄が最大の産業であった。高度経済成長期に人口減少が急激に進み、全国に先駆けて人口減少と高齢化が進む地域となっている。

◎「鉄道」好きから「邑南町」好きへ

「ゴトン、ゴトン、ゴトン……」。JR三江線（平成30年3月31日廃線）旧・口羽駅を出発した2両編成のトロッコ列車が、ゆっくりとトンネルに向かって進む。トンネルの出口付近で停車した列車から降りた乗客が枕木を踏みながら出口に向かうと、そこから江の川に架かる鉄橋が延びている。鉄橋の真ん中が広島県との境となる。「鉄橋には木の枕木が使われていますが、ほら、トンネル内はコンクリートの枕木でしょ」、「鉄建公団がトンネルを掘ってここにレールを一気に通して、昭和50年に三江線を全線開通させました」。周辺には鉄道の設備や機器も残されており、主催者の説明にも熱が入る。鉄道ファンでなくとも、普段立ち入れない場所からの景色に感嘆の声が出た。

帰路はトンネルの天井に三江線と地域の歴史をたどる映像が映し出される。往復2km、鉄橋付近の散策も含め、約30分の異空間への旅の演出である。このイベントは、地元のNPO法人江の川鐵道が廃線跡地を利用して企画したもので、列車の運転や説明には広島のローカル鉄道愛好団体「安芸矢口企画」の協力を得て実現した。「いつもは入れない旧・宇都井駅のホームも開放しているので、ぜひどうぞ」と声をかけてくれたのは、一日駅長として安全管理の旗を振っていた榎崎享子さん。尾道から来たという。鉄道が好きで、旧・宇都井駅で企画していたレールカフェに参加して以来、地域の人たちとのふれあい



レトロな駅舎を遺す旧・口羽駅
旧・口羽駅、旧・宇都井駅とその周辺は、令和3年4月に町が鉄道公園として整備した。駅舎内部のガチャボンで訪問証明書が手に入る。

に心を癒され、今では酒米を植えるイベントに参加するなど、羽須美地域に溶け込んだ活動をしている。

旧・口羽駅に戻り、旧・宇都井駅には車で移動した。線路は続いているが、町が所有している区間はトンネルまでで、トロッコ列車で行くことができないためだ。

旧・宇都井駅は、「天空の駅」の異称で知られ、谷を渡る鉄橋の上にホームが設置された人気スポットだ。ホームの椅子に座り、地産のお菓子とお茶で一休みすると、眼下に石州赤瓦の屋根と野の緑のコントラストが美しい宇都井の集落が見下ろせた。



●これこそが“関係人口”だ !!

トロッコ列車を企画しているNPO法人江の川鉄道の立ち上げにも関わった邑南町羽須美支所地域振興係プロジェクトマネージャーの森田一平さん。羽須美に生まれ、新聞社勤務後、平成29年4月から役場職員として羽須美地域の振興事業に力を振るっている。そのきっかけは、JR三江線の廃線だった。「昭和22年には6,731人だった羽須美地域の人口は1,400人を下回り、令和2年度に生まれた子どもはたったの4人。三江線の駅があった羽須美地域が、廃線後に衰退するのは目に見えていました」。

地域の将来を憂慮した石橋良治町長は、羽須美地域の振興を公約に掲げ、「羽須美振興推進室」を設置、鉄道好きで、仕事のかたわら三江線の廃線に関連したイベントで羽須美に通っていた森田さんに白羽の矢を立てた。「廃線決定後、列車には乗り切れないほどの人が押し寄せました。このエネルギーのわずかでも、廃線後の羽須美地域の振興に活かさないものかと考え、廃線までの間にできるだけ宇都井駅の認知度を高めようと、イベントを次々に打ち出しました。高齢化率56%と生活だけで手一杯の地域で、新プロジェクトを行うのは大変でしたね」と森田さんは当時を振り返る。その中で、気づいたことがあった。「宇都井駅に来る人はだいたい鉄道好きですが、鉄道に関係ないイベントを手伝おうという人たちが何人も出てきたのです。これこそ関係人口ですよ」。



一方、平成28年11月には、三江線に関連した活動をしていた9団体が「三江線地域フォーラム」を結成し、廃線跡地を邑南町が取得して地域振興に役立ててはどうかなどの提言を町に行った。

廃線から1カ月後の平成30年5月にはNPO法人江の川鉄道が発足。総務省の関係人口創出モデル事業にチャレンジし、JRの協力のもと、廃線跡のレールを活用して、関係人口によりトロッコ列車を走らせる実証実験を開始した。加えて、平成22年から宇都井駅で行っていたイルミネーション事業「INAKAイルミ」のスタッフが関係人口として創出されるかどうかとも検証した。

その効果に可能性を見出した町は、令和元年7月、JRから周辺のトンネルを含む旧・宇都井駅と旧・口羽駅を無償で譲り受けた。

「JRは駅の管理費と将来的に老朽化した場合の橋の撤去費も町に提供してくれました」と森田さん。地域振興に取り組む人材の創出と廃線資源の活用への道が大きく開けた。

トロッコ乗り場の受付で鉄道グッズを販売中。グッズの売り上げがNPO運営の貴重な収入源となる。



邑南町羽須美支所地域振興係プロジェクトマネージャー・森田一平さん



3 5



4



6

1 旧・口羽駅のトロッコ列車乗り場。左に立つのが榎崎享子さん。2 地上20mの日本一の高架駅旧・宇都井駅は116段の階段を登ってホームに上がる。田植えのシーズンには、田んぼの水に映る「さかさ宇都井駅」を撮影する人が多く訪れる。3 旧・宇都井駅ホームは橋梁上にあるため点検が必要。5年ごとに行う点検はNPO法人江の川鉄道が行い、費用も負担している。4 トロッコ車両の復路はトンネル壁面に映し出された映像をながめながら進む。5 広島市内で開催された「江の川鉄道ファンミーティング」。6 7 旧・宇都井駅ライトアップイベント「INAKAイルミ」には、住民とともに多くの関係人口が参加して準備や運営が行われる。



7





1 羽須美地域で実施された「小さな拠点づくり」事業ワークショップ。住民約50人が参加して地域の課題を協議した。2 おおなんDIY木の学校。これまでに延べ87人が参加しており、終了後もリノベーションの現場に向いてくれる人も多い。またこれらの現場には地域おこし協力隊と連携協定を結んでいる慶應義塾大学の学生も協力している。3 カフェ&ベッド「うづい通信部」。長く空き家だった築95年の旧服部医院を、祖父母の家に1ターンしていた住民が、町の助成金やクラウドファンディングを活用してリノベーション。おおなんDIY木の学校初の作品。4 町では棚田の景観を守るためのオーナー制度も展開している。地域の農作業に対する関係人口の興味も高く、収穫だけでなく、田植えや草取りなどに参加する人も多い。

● 何も無い地域でも“関係人口”は生まれる

羽須美地域では、廃線跡地の活用につき令和2年から、地域の空き家の改修現場を学校とする「おおなんDIY木の学校」の事業に取り組んでいる。古民家の伝統的な建築技術を実践的に習得できる場だ。また、廃線後の地域交通の課題を解決するため、島根県の「小さな拠点づくり」モデル地区推進事業(令和2～6年度)を導入し、NPO法人はすみ振興会を設立。ワークショップ等を実施して地域課題を共有し、解決に向けた動きを開始した。

これらの事業には地域おこし協力隊も配置されているが、鉄道やDIYの関係でやって来た人たちが地域への興味を深め、サツマイモの植え付けなどの農作業や、INAKAイルミのスタッフとして地域の事業に参加している。来町のモチベーションを引き出す核となるグループから情報が広がり、関係人口を誘う流れが自然にできていった。森田さんは、できるだけ多くの核をつくり、地域への入り口を広げていきたいと考えている。大切なのは、「関係人口を“お客さん”にはしないこと。“思い”を共有する仲間なのですから」。

羽須美地域から始まった関係人口を増やす事業は、今、町全体に広がっている。令和2年、町は「邑南町観光戦略」を策定し、基本理念として「観光やめまず、関係ははじめます」を掲げた。従来の「観光」から脱却し、地域に暮らす人々とその営みそのものを「資源」として、人と人の「関

係」を新たに育み、町民と邑南町に共感する人々の共創による新しい観光スタイルを打ち出した。

観光だけでは物足りないが、移住して根を張るとなれば大ごとだ。その中間のゆるやかな関係の中に身を置き、地域の人々と何かに取り組むことで、小さな社会貢献の実感を得たいと願う人は、想像以上に多いのかもしれない。

森田さんは、「消費や納税にとらわれず、地域と関係を結ぶ人たちが関係人口ではないか」と考えている。「関係人口は、観光客としてわが町にお金を落とす人たちでも、税金を納めている人たちでもありませんが、地域に貢献してくださる仲間です。今や行政が移住者の窓口を担っている時代、行政が関係人口のコーディネートをしてよいのでは」と考えた。「羽須美は廃線と空き家のような、そのまま朽ちるものをみんなの努力で資源とすることができました。地域外の人たちの興味の一つに応えられれば、その地域自体に興味をもってくれます」とその先の思いをついだ。

人口が減った地域の持続可能性を他地域に住む人たちと共につくる時代、問題はその地域に魅力や興味を感じ、愛着をもって力になってくれる人をいかに獲得できるかだ。

何も無いと考えがちな地域でも、アイデア次第で、「第2」「第3」の故郷と思わせる魅力をつくることできる。自ら動き出さなければその先の「関係人口」は生まれません。

【取材・写真協力 邑南町羽須美支所地域振興係】